HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学出身初任期教員の直面している困難から模索する教職課程改善の方途　(1)
Author(s)	梅津, 徹郎; 近藤, 健一郎; 大野, 栄三 他
Citation	北海道大学教職課程年報, 1, 3-22
Issue Date	2011-03-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/45342
Type	departmental bulletin paper
File Information	kyoushoku Hokkaido.pdf



Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道大学出身初任期教員の直面している困難から模索する教職課程改善の方途（１）

梅津徹郎・近藤健一郎・大野栄三・浅川和幸・駒川智子・佐藤公治

はじめに

北海道大学では、卒業生や修了生（以下、区別する必要がある場合を除き、卒業生と一括して表記する）を、中学校、高等学校および特別支援学校の教員として多く送り出している。ここ数年の教員就職者数は、2007（平成 19）年度 46 名（大学学部卒 16 名、大学院修了 30 名）、2008（平成 20）年度 53 名（同じく 15 名、38 名）、2009（平成 21）年度 42 名（同じく 6 名、36 名）である[1]。この数値から、昨今の動向として、大学院修了者の教員就職者が増加し多数を占めていることが見てとれる。なお北海道大学の入学者の約半数が北海道外出身者であることを反映して、教員としての就職も北海道内を中心としつつも全国各地に広がっている。

一方、教員に対する社会的な視線の厳しさについては、贅言を要しないであろう。そのことと相互作用的に、教員養成政策において教員免許状取得希望者および課程認定大学への要請は強まり続けている。ごく直近の一例だけ挙げておこう。中央教育審議会は、答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」（2006 年 7 月）において、「大学の教職課程を、『教員として最小限必要な資質能力』を確実に身に付けるものに改革する」ことを求めた。文部科学省はそれを受けて教育職員免許法施行規則を改正し、本 2010 年度大学入学者より新たに「教職実践演習」2 単位を免許状取得の必修科目として課すこととした。

これらのことに鑑みれば、北海道大学は一定の力量をもった卒業生を社会、教育界に送り出すという社会的責務を負っており、そのために、さまざまな検討をしなければならない。教職課程を履修する学生が身につけるべき力量とは、どのようなものであろうか。また、そのために教職課程として、どのような教育を行っていくことが必要であり、現状においてどのような改善、充実を図るべきであろうか。さらには本学出身の初任期[2]の教員を対象とした何らかの支援も求められているであろうか。

---

[1] 大学院修了者は、修士課程と博士後期課程の合計である。この教員就職者数は、卒業生が卒業年次に各学部等に提出する進路届を北海道大学キャリアセンターが取りまとめたものである。なお、常勤講師、非常勤講師も含んでいることは他大学と同様である。ただし、北海道大学卒業後に大学院修士課程に進学した院生などのなかには、高等学校等で非常勤講師を勤めている場合もあるが、それは含んでいない。詳細な集計については、本誌に資料編として収録した部局別教員就職状況をご覧頂きたい。

[2] 本稿でいう「初任期」とは、正規採用年数 1～3 年目および正規採用に至っていない常勤講師、非常勤講師の時期を指している。

本研究は、このような基本的な問いを背景として、北海道大学出身の初任期教員と北海道大学教職課程履修者(教育実習終了者)への聞き取り調査およびアンケート調査により、初任期教員の資質能力の向上を促すための教職課程改善の方途を見出そうとするものである。

私たちは、2009（平成 21）年度に文部科学省が行った教員の資質能力追跡調査事業の委託を受けて、本研究に着手した。この事業は、単年度ごとの委託ではあるが、2011（平成 23）年度までの 3 年間の展開が予定されている。この 3 年間の調査研究によって、第一に初任期教員の勤務実態とりわけ直面している困難に基づいて大学で養成すべき力量を明らかにし、第二に教職課程全体の履修経験に基づいた改善への要望を調査することによって、北海道大学教職課程の改善、充実を図ると同時に、初任期教員のフォローアップ体制を築くことを意図している。換言すれば、大学で養成すべき力量を初任期教員の実態に基づき明らかにすることを土台として、その改善の具体的な改善に向けた方途を大学の教職課程と卒業後の初任期にまたがって模索しようとする研究である。3 年間の計画概要を図示すれば、次頁の図のとおりである。

本稿は上述の課題を明らかにしようとする一連の研究の第一報であり[3]、2009 年度に実施した調査研究のうち初任期教員を対象とするものに限定し、北海道大学出身の初任期教員がどのような困難に直面しているのかを明らかにするための前提として、まず彼らの勤務実態を明らかにするものである。

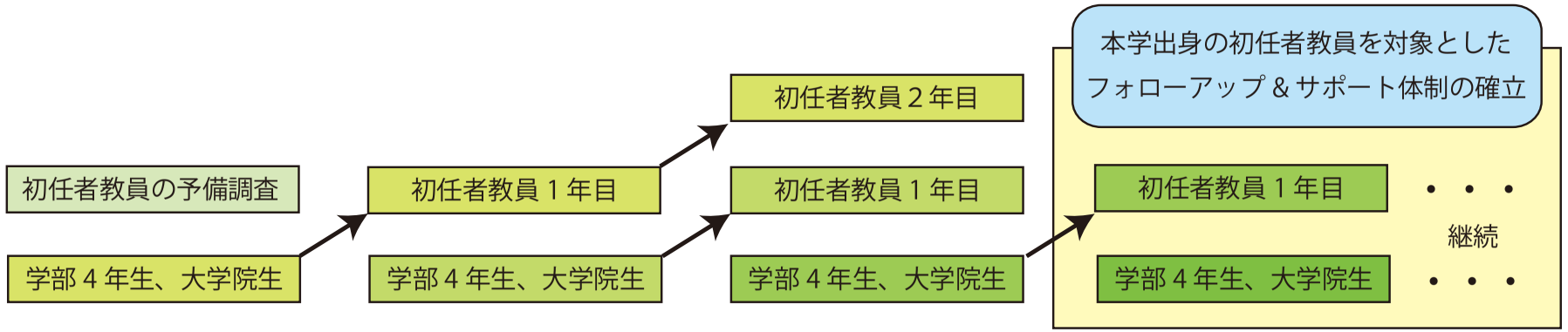
なお、教職課程の改善、充実という点においては、本研究のような初任期教員の勤務実態から考察するという視角のほかに、教職課程履修者の多くが教職以外に就職するという実態や、一生涯にわたって教職に従事する場合が多いことから初任期にとどまらない教師としての力量形成を展望することなど、検討すべき重要な論点は多々ある。それら多くの論点のなかでも、初任期は大学での教員養成が最も明確に問われる時期であろうことにとどまらず、教師のライフコース研究において初任期は教師の成長において特別に大きな意味を持つことが指摘されてすでに久しいこと[4]、にもかかわらず北海道大学出身者が多く就職する高等学校教員を対象としたライフコース研究は蓄積が乏しいと思われることから、まず初任期教員を対象とした調査研究に着手するものである。その他の課題についての調査研究は、今後を期したい。

---

[3] 北海道大学在学中の教職課程履修者を対象とした調査を含む 2009 年度の全体的な調査報告は、以下によって公表している。『初任者教員の資質能力の向上を促すための教職課程改善の方途　平成 21 年度文部科学省教員の資質能力追跡調査事業成果報告書』北海道大学大学院教育学研究院、2010 年。なお報告書の入手を希望される方は、研究代表者の梅津徹郎または北海道大学大学院教育学研究院までご連絡いただきたい。

[4] 稲垣忠彦ほか編『教師のライフコース』東京大学出版会、1988 年、第四章（執筆は山崎準二)。

「初任者教員の資質能力の向上を促すための教職課程改善の方途」事業の概要



【平成２１年度】

（1）学部４年生・大学院生
- キャリア設計と進路
- 本学の教職課程について
- 教員採用試験について

（2）本学出身の初任者教員
- 平成 22 年度調査に向けの予備調査として実施
- 調査項目と方法の検討

（3）調査結果の活用
- 報告書作成（関係機関へ配布）
- 次年度調査の準備
- 本学教職課程の改善検討
- 教育委員会との協議

【平成２２年度】

（1）学部４年生・大学院生
- キャリア設計と進路
- 本学の教職課程について
- 教員採用試験について
- 新規調査項目の追加

（2）本学出身の初任者教員
- 道内外の１年目教員
- インタビュー調査
  道内３件、道外２件抽出
- 次年度調査の検討

（3）調査結果の活用
- 報告書作成（関係機関へ配布）
- 次年度調査の準備
- 本学教職課程の改善検討
- 教育委員会との協議

【平成２３年度】

（1）学部４年生・大学院生
- 昨年度と同様の調査

（2）本学出身の初任者教員
- 道内外の２年目教員を追加（インタビュー調査も実施）
- 昨年度と同様の調査

（3）調査結果の活用
- 報告書作成（関係機関へ配布）
- 本学教職課程の改善検討
- 教育委員会との協議

（4）本学出身の教員を対象としたフォローアップとサポートを継続して実施する体制の検討

- **教職課程の改善充実**
  学部段階の講義形態・内容の改善
  大学院段階の教職課程の充実
  教職実践演習の内容の充実
- **フォローアップ＆サポート**
  本学出身初任者教員を対象
  フォローアップによる状況把握
  継続したサポート体制
  教育委員会との協議

１、調査の対象と方法

2009 年 11 月から 2010 年１月にかけて、北海道大学出身初任期教員を対象とする調査を行った。その調査対象者は、2008 年度に北海道大学各学部を卒業または北海道大学大学院各研究科・各学院を修了したのち、直ちに教員として就職した 53 名のうち、連絡先の判明した 39 名を基本とした。

その 39 名のうち、学歴（学部卒か大学院修了か）、勤務地（北海道内か北海道外か、また都市部か郡部、離島か）、勤務校の形態（公立か私立か）、種別（普通科か専門学科か）および学校規模を基準として、協力を依頼し快諾してくださった３名の方に聞き取り調査を実施した。その際、都市部大規模校、郡部、離島勤務者が含まれなかったため、また常勤あるいは非常勤の講師経験を経て正規採用にいたる昨今の一般的な動向を反映できなかったため、2007 年度以前の卒業でかつ正規採用１校目の方３名を聞き取り対象者として追加した。その他の対象者 36 名については郵送によるアンケート調査を実施し、14 名の卒業生から回答を得た（回答率 38.9%）。

聞き取り調査対象者６名と郵送アンケート調査回答者 14 名の基本属性は､以下の表１、表２のとおりである。

表１　　インタビュー調査対象者６名の属性

	A さん	B さん	C さん	D さん	E さん	F さん
年齢	30	25	26	25	28	24
性別	女	男	男	男	男	男
最終学歴	文・院修了	理・院修了	農・院修了	水産･院修了	理学部卒	理学部卒
勤務地	北海道	近畿地方	近畿地方	北海道	北海道	北海道
地域特性	郡部・離島	地方都市	地方都市	地方都市	都市部	地方都市
勤務校形態	公立高校	公立高校	私立高校	公立高校	公立高校	公立高校
勤務校の種別・規模	普通科	普通科	普通科	専門学科	普通科	専門学科
	小規模校	大規模校	中規模校	小規模校	大規模校	小規模校
現在の採用形態と年数	正規、１年目	常勤講師、１年目	非常勤講師、１年目	正規、１年目	正規、２年目	正規、２年目
講師経験	常勤、１年	なし	なし	なし	常勤、３年	なし
担当教科	英語	理科	理科	水産	数学	数学

（注）学校規模は、学年 1～2 学級を小規模校、学年 3～6 学級を中規模校、学年 7 学級以上を大規模校とした。この基準は表２においても同様である。

表２　　郵送アンケート調査回答者１４名の属性

	G さん	H さん	I さん	J さん	K さん	L さん
年齢	26	25	26	25	25	25
最終学歴	文・院修了	文・院修了	教育･院修了	教育･院修了	教育･院修了	理・院修了
現在の採用形態と年数	常勤講師、１年目	正規、１年目	正規、１年目	正規、１年目	正規、１年目	正規、１年目
担当教科等	地理歴史	地理歴史	特別支援	数学	特別支援	数学

	Mさん	Nさん	Oさん	Pさん	Qさん	Rさん
年齢	25	25	24	23	23	23
最終学歴	理・院修了	理・院修了	理・院修了	教育学部卒	理学部卒	理学部卒
現在の採用形態と年数	正規、１年目	正規、１年目	正規、１年目	正規、１年目	正規、１年目	正規、１年目
担当教科等	数学	数学	数学	国語	数学	数学

	Sさん	Tさん
年齢	23	25
最終学歴	理学部卒	理学部卒
現在の採用形態と年数	正規、１年目	正規、１年目
担当教科等	数学	数学

２、調査の内容

調査は、初任期教員の勤務実態を把握するとともに、直面している課題を尋ねることを内容としている。本稿末尾に資料として、聞き取り調査用質問票（資料１）と郵送アンケート調査用質問票（資料２）を付した。ただし、資料１は聞き取り調査実施当初のもので、聞き取りを実際に行うことにより徐々に質問項目についても改良を加え、授業を進行する際の注目点など理論的なことを減らし、相談にのってくれる校内の先生の存在など勤務環境に関する実際的なことを加えていった。おおよそ資料１を順次改良して資料２に至ったといってよい。なお聞き取り調査では、当然のこととして、話題の展開に応じ臨機に質問項目の加除を行った。

具体的な質問項目は、おおよそ以下のような内容で構成した。年齢や学歴等の基本属性のほかに、現在の勤務にかかわって①授業のこと（資料１(9)、(18)～(27)、資料２(7)、(13)～(15)）、②クラス担任など学級のこと（資料１(10)、(28)～(36)、資料２(8)）、③部活動の

指導を含め校務分掌のこと（資料１(11)～(13)、(37)～(43)、資料２(9)～(11)）、それら全体にかかわるものとして、学校内外での研修（自主研修を含む）や学校内の同僚教職員との関係を尋ね（資料２(16)～(23)）、最後に北海道大学の教職課程への評価および改善に関する意見を指摘してもらった（資料２(28)～(29)）。

３、調査の結果

（１）基本属性および勤務時間

聞き取り調査および郵送アンケート調査をあわせた調査対象者 20 名の身分は、正規採用 17 名（85%）、常勤講師 2 名（10%）、非常勤講師 1 名（5%）であった。ただし、非常勤講師の１名は、クラス担任や部活動、校務分掌の担当などはないものの、週あたり授業時間数は正規採用並みの 17 時間であった。そのため、以下、この非常勤講師も含めた20 名を基本的に区分することなく調査集計および考察を進めていくこととする。

20 名が勤務している学校種は、高等学校 15 名（75%）、中学校 4 名（20%）で、1 名（5%）は不明である。

そして20名全員が平均して出勤から退勤まで12時間以上と回答したことは特徴的である（通勤に要する時間は除く）。

（２）授業

まずどのように授業準備をしているかの回答は、次のとおりであった。

だいたい学校でする	１２名（60%）
しばしば家に持ち帰る	７名（35%）
無回答	１名（ 5%）

前述のような長時間勤務でありながら、「しばしば家に持ち帰る」初任者が多かった。その理由は、聞き取り調査に基づけば、部活動指導終了後では授業準備が終わらないためであった。「だいたい学校でする」と答えた初任者のなかには、土日の部活動指導終了後に学校で行うという方が 2 名いた。

続いて、授業準備で参考にしていることについて複数回答で尋ねた結果は、次のとおりであった。

同僚教師の授業	１３名（65%）
教育実践集などの書籍	１０名（50%）

その他として 3 名が回答しており、その内容大学時代の講義資料、高校時代のノート、他校の先生からのアドバイスなどが挙げられた。

そして授業準備において、学校内の先生方に相談するかについての回答は、次のとおりであった。

時々同僚教師からアドバイスをしてもらう	１２名（60%）
たいてい一人でする	７名（35%）
その他	１名（ 5%）

聞き取り調査対象者は、みな共通して「教科指導の力量を向上させたい」という思いを強くもっていた。にもかかわらず「たいてい一人で」授業準備をする状況も多く見られた。それは初任者が望んでそのようにしているというよりも、勤務校の教科担当が 1、2 人というごく少数であるゆえに、アドバイスをもらいたくともももらえないというやむをえない事情によっているというべきものであった。郡部、小規模校勤務者の場合に、その傾向は顕著であった。

（3）学級担任

学級担任をしているかどうかについては、次のとおりであった。

学級担任	７名（35%）	
副担任	１２名（60%）	
担当なし	１名（ 5%）	非常勤講師

初任者の多くは副担任であるが、中学校や私立高校の初任者では学級担任になっている場合があった。

（4）部活動および校務分掌

まず担当している部活動顧問を希望したか否かについては、次のとおりであった。

希望した	７名（35%）
希望しなかった	１１名（55%）
無回答	２名（10%）

続けて部活動の指導にあたる平日１日あたりの時間は、次のような分布であった。

１～２時間	７名（35%）	
３～４時間	７名（35%）	
無回答	５名（25%）	
部活動指導なし	１名（ 5%）	非常勤講師

このような長時間を部活動指導にあてるため、部活動の指導にあたる教員は初任期であろうとなかろうと、授業準備その他のことに着手できるのは部活動指導終了後（午後 6、7 時以降）となる。初任期教員は、他の教員にもまして授業準備は不可欠であり、このことが学校内で長時間の勤務をすることにつながっている。

さらに、多くの初任期教員が、土曜日、日曜日にも部活動の指導を行っており、休みが全くない日々が続くこととなる。聞き取り調査を行った体育系部活動の顧問である郡部・小規模校勤務の初任期教員は、土曜日、日曜日などに練習試合をもつことも多く、ほとん

どの場合試合会場までの移動だけで片道１時間以上の引率をするとのことであった。

校務分掌については、非常勤講師の１名を除き、全員が生徒会担当など何らかの分掌を担当していた。校務分掌や生徒指導等で相談にのってくれる相手の有無について尋ねた結果は、次のとおりであった。

いる	１６名（80%）
いない	１名（ 5%）
無回答	３名（15%）

聞き取り調査において相談する相手について尋ねたところ、学年主任、学級担任、分掌部長が多く、その内容の多くは生徒指導に関するものであった。協働で取り組むことの多い生徒指導については、ほとんどの場合、先輩教員に相談しながら指導にあたっているといえよう。前述したように授業準備を相談する相手をもてずに一人でしている、一人でせざるをえない初任期教員も多いことと比較するとき、教科による専門性の差異の大きい授業準備と生徒指導との違いを見出すことができる。

（5）初任者としての学び

法定研修として義務づけられている初任者研修[5]を除いた授業研究会などに参加した経験の有無は次のとおりであった。

会員として参加している	４名（20%）
会員ではないがときどき参加している	８名（40%）
参加する機会がほとんどない	７名（35%）
その他	１名（ 5%）

聞き取り調査において、その理由を尋ねたところ、一般的に職務をやりくりすることの難しさのほかに、郡部に所在する学校に勤務している場合、都市あるいは地方都市で開かれることの多い研修の会場までの移動時間およびその交通費負担という問題も加わっていた。

続けて教育実践の力量を向上させるために購読している書籍、雑誌があるか否かについて尋ねた結果は次のとおりであった。

定期購読している雑誌がある	３名（15%）
必要なときにときどき購入している	１３名（65%）
無回答	４名（20%）

[5] よく知られていることだが、常勤講師や非常勤講師に初任者研修は課されておらず、その受講機会は与えられていない。また初任者研修の法的根拠が教育公務員特例法にあるゆえに、私立学校教員も同様に課されておらず、独自に日本私学教育研究所が主催して、北海道・東北地区のような地区ごとに初任者研修会を開催している。北海道大学卒業生が私立学校教員や常勤講師などとして多く採用されていることを考慮することは、初任期教員のフォローアップ体制を築くうえで重要な課題となることと思われる。

聞きとり調査において具体的な書籍、雑誌について尋ねたところ、nature などの専門雑誌があげられた。このことは、北海道大学出身教員がその専門とする教科に関する教育に重きを置いていることが多いことを反映していると思われる。

その購入方法を複数回答で尋ねたところ、書店が 14 名（70%）、インターネット 9 名（45%）であった。聞き取り調査の際に、近隣に書店がなく実際に書籍を手にとって購入する機会に恵まれないため、インターネットで購入したり、札幌などの都市に出た際にまとめて購入したりしているという状況を語った初任者が 3 名いた。いずれも郡部、地方都市勤務の初任者である。

（6）北海道大学の教職課程への改善要望

最後に、北海道大学の教職課程への改善要望を教員となった現在の立場から指摘してもらった。その回答を一覧として、次頁に表 3 としてまとめた。

これらの要望は、おおよそ以下のようにまとめられよう。

① 生徒理解、教育相談、また特別支援に関すること（B さん、C さん、N さんなど)。
② 模擬授業など授業実践に関すること（F さん、H さん、I さんなど)。
③ 学校見学により、今の学校について体験的に学ぶこと（G さん、J さん、K さんなど)。
関連して、現職教員の講義・講演を聞くこと（E さん、Q さん)。

J さんが「これは現場に立ってみて実感できたことです」と記したように、教育内容に関する北海道大学の教職課程への改善要望は、北海道大学教職課程の不十分な点を指摘しているにとどまらず、自らの受けた教員養成教育で身につけたものと初任者としての自分が必要としているものとの乖離している部分を示していると考えられる。J さんの場合でいえば、クラス担任としてするべきことについて、教職課程で修得することはできなかったので、それを埋められるような改善をしてほしいということである。

そのような視点でとらえなおすとき、教科内容に関する要望がないことも特徴である[6]。各学部での専門的な教育・研究、とくに大学院修了者はいっそうのそれによって、教科内容の基礎は困難として直面してはいないということであろう。それでも授業の教育方法に関する理論や実際的な授業づくりには困難を感じているといえよう。やや踏み込んでいえば、実際に教員として授業や学級経営等に臨んで、生徒の教科内容に関する理解の質や到達度、また生徒の志向性などを把握することの難しさに直面し、そのような具体的な場における授業づくり等に困難を感じているということではないだろうか。

教職課程への改善要望として学校見学があげられていることも、そのような観点からの

[6] ただ一人専門教科に関する内容の充実を要望しているP さんは、他学部で取得することのできる免許状によって教職に就いており、免許状取得に必要な教科に関する科目の最低限をやや上回る程度の学習であったためではないかと思われる。この要望は、他学部履修などにより取得する免許状の実質を担保するしくみを北海道大学は築く必要性を示しているととらえるべきものであると考えられる。

表3　北海道大学の教職課程への改善要望一覧

Aさん	教育学部以外の学生も、教育方法に関する基礎を学べたらいい。
	実際の学校現場で使える内容が多くあるといい。
	教員採用試験を意識した授業があってもいいと思う。
Bさん	教育心理に関する知識は、教科の指導でも生徒の個別指導でも役に立つので、充実させるべきだと思う。
Cさん	今の中学生、高校生の様子がわかる授業があるといい。
	生徒との関係づくり、生徒理解に関する内容の授業がもっとあっていい。
Dさん	函館キャンパス（注1）は集中講義が多かったので、一年間ゆっくり学びたかった。何か相談したくても、教職担当の先生が近くにいない。
Eさん	いろいろな学校現場（高校、中学）の先生の話が聞きたかった。
	教職科目は大人数なので、ディベートのようなことができなかった。
	制度的な話が多かったように思う。もう少し実践的な話が聞きたかった。
	今の話題、トピックを聞きたい。
Fさん	教科指導では模擬授業など、実際の授業の進め方を学べる機会が多くあるといい。
	教育相談や生徒とのかかわり方について学べる科目を充実させるといい。
Gさん	いろいろな学校（とくに困難校）を見学できるようなシステムがあれば良いと思う。少人数でもよいので。
Hさん	模擬授業をもっともっと増やすべき。北大は、知識重視である。現実、公立の教員採用試験にしても私学の公募にしても、実践力を試される比重は大きいし、本当に志望している学生には教壇に立つ経験をもっとたくさんさせてそういう力を付けてあげてほしい。
Iさん	実際に授業をつくり授業を行なう。特別支援に関する内容。
Jさん	実際に現場に立って経験することが大事だと思う。授業・HRで何を話すか、休み時間にどう生徒と接するか、指導する時はクラスでするか呼び出してするか、掃除の指導、学級通信、HR教室のつくり方など、担任としてするべきことはいくらでもあります。しかしこれは現場に立ってみて実感できたことです。教職課程でも教育実習でもいいので、現場の雰囲気を感じられる科目をぜひつくってほしい。
Kさん	札幌市内の学校へお願いして現場実習（教育実習以外で）できると良いのでは。週1回など定期的に。
Lさん	とくに要望はない。現状で良いと思う。
Mさん	（無記入）
Nさん	アスペルガーやADHDなどについての講義はあったと思うが、現場に出て大変苦労しています。このあたりの内容について、もう少し詳しく教えてもらえれば学生にとっては良いことだと思います。
Oさん	（無記入）
Pさん	専門教科に関する内容を充実させるべきだと思います（注2）。教員となったときに、教科に関する知識が不足していると感じました。
Qさん	学校参観や教科における模擬授業の実践と研究協議（自分の時は教科教育法Ⅰ、Ⅱで指導案は数回書いたが、模擬授業はできなかった）。
	現場の先生を招いて話をしていただく機会を増やす。
Rさん	実践的なもの。
Sさん	生徒や子どもたちと接する時間がもう少し欲しかったと思います。
Tさん	（無記入）

（注1）水産学部および大学院水産学院は函館に所在している。そのキャンパスには、教職課程を担当する専任教員はいない。
（注2）本文注6を参照していただきたい。

必要性を示しているものと考えるべきであろう。すなわち、北海道大学出身者の多くが進学校と呼ばれる高校卒業者であることを反映して、そうでない高校に赴任して困難を感じたとき、教員となる前の大学での教職課程において、いろいろな学校を見学しておくことやその生徒たちと接しておくべきであったと強く感じることになるのではないだろうか[7]。

おわりに

本稿では、北海道大学出身初任期教員の直面している困難を明らかにするための前提として、彼らの勤務実態を明らかにした。それらに基づき、以下のことが指摘できよう。

郡部、離島の小規模校に勤務する初任期教員と、都市部に勤務する初任期教員とでは、勤務実態に大きな差異があり、それは「教員集団のなかで教師として成長する」という点での格差といえる。授業や生徒指導において、学校内の先輩教員からアドバイスをもらうにしても、各種研究会に参加するにしてもである。とくに北海道の場合、広大な地域に、郡部、離島のへき地校、小規模校が多く存在していることから、この点は重要な点である。この問題は基本的に任命にあたる教育委員会の人事配置に属するものであるが、本学の教職課程の改善、充実を図ろうとするときの欠かせない視点となるものである。

初任期教員が生徒理解に困難を感じることは十分に予想されうることであるが、教職課程への改善要望にそのことが示唆されていた。それらの困難は、①初任期教員が個人で改善すべきこと、②教員養成に責任をもつ大学が改善策を講ずべきこと、③教員採用にあたる教育委員会と連携して改善策を講ずべきことが混在していよう。今後の調査によって、北海道大学出身初任期教員が直面している困難を具体的に明らかにし、困難の質に応じて、大学・大学院の教職課程の改善を図るとともに、初任期教員に対する何らかのサポート体制を築くことにつなげていきたい。

（付記）本稿は、本文でも記したように、2009 年度文部科学省による「教員の資質能力追跡調査事業」の委託による調査に基づいている。梅津が責任執筆したその成果報告書に依拠しながら、近藤が加筆修正整理を施した草稿に対する討議を経て成稿となったものである。なお、事業の概要図は大野による作成図を、質問票は浅川と駒川とによる作成票をそれぞれ素案として討議したものである。

[7] 北海道大学でも、2013 年度の「教職実践演習」開講を視野に、本 2010 年度から札幌大通高等学校の見学を教職課程の授業に組み入れた。詳細は、本誌所収の梅津徹郎「プレ『教職実践演習』の試行」を参照いただきたい。そのほか、いくつかの高校や小学校の学習ボランティアを紹介しており、意欲的な学生がそれらに参加している。

（資料１）

高等学校教員の教育と力量形成に関する調査

調査者［　　］

対象者［　　］

１．先生のことについて教えてください

⑴年齢はおいくつですか（　　才）

⑵最終学歴と学科について教えてください

２．教員として働くまでの過程について教えてください

⑶教員になろうと考えられたのは、何時ですか。なぜでしょうか

⑷教育実習において、教員という存在や教育するということについてどのようなことを感じましたか。感想をお聞かせください。また、どのような課題が自分にあると思いましたか

⑸教員採用試験を受けたのは、北海道だけですか

⑹初任者研修は、どこで受けられましたか。そこで学ばれたことの中で、最も参考になったのは、何ですか。自分が教員をやってゆく上で、どのような課題があると思いましたか

⑺最初に赴任された高校はどこですか。赴任に当たって、どのように教育に望む必要があると言われましたか。また、その事をどなたに言われましたか

⑻これ以外に学校経験がある場合は、要約的に教えてもらうこと

３．現在のお仕事についてお聞かせください

⑼担当する教科は何ですか。担当している教科は全て教えてください

⑽クラス担任になっているのですか

(11)学校組織上の分掌は何ですか。何人で、どのように分担するのでしょうか

(12)部活等の受け持ちは何でしょうか。どのような理由で、受け持たれているのですか

(13)それ以外のお仕事としては何がありますか

(14)平均的な勤務時間について教えてください

(15)前日を例にとって、仕事のスケジュールを教えてください

(16)現在のお仕事全体で、最も力を入れているところ、あるいは力を入れたいと思っていることは何ですか。また、なぜですか

(17)ご自身の教員としての、現在の課題はどこにあると考えますか。その課題を達成するためには、どのようなことが必要だと考えますか

４．教科教育の実践について教えてください

(18)科目は何人で担当しているのですか。どんな分担になっているのですか（全ての担当科目について聴くこと）

(19)授業の計画は、どのように立てられたのですか

(20)授業準備はどのようになさっていますか。授業において、心がけておられることはどんなことですか

(21)実際の授業で計画通りに進行する場合は、何割ぐらいありますか

(22)授業が進行してゆく時に、進み方や方向を評価するために、どんなことに注目しますか

(23)授業を聞く、あるいは参加する生徒のどのような点に注目しますか

(24)授業全体が上手くいっているかどうかの判断基準は何ですか

(25)授業全体が上手くゆかない時には、それをどのように修正しますか。ひとりで修正できない時には、どのようになさるのですか

(26)授業の観察眼や判断基準を確立する上で、何が参考になりますか。あるいは、これから深めてゆくために、何を参考にしたいと思いますか

(27)これらの教科教育実践は、どのようにして考え・身に付けたのですか。参考になったものや影響を受けた人やコトを教えてください。また、さらに教科実践を深めてゆくためには、どのようなものやコトが必要だと考えますか

５．クラス経営について教えてください

(28)受け持っているのは（　　年）（　　組）。　副担任は（　　年）（　　組）

(29)副担任はどのような先生ですか。どのようにサポートしてくれますか

(30)担任をしているクラスにはどんな印象を持っていますか。どんな特徴の生徒がいますか

(31)クラス経営において、現在抱えている問題はどのようなものがありますか

(32)クラス経営の見通し、あるいはクラスを経営してゆく戦略は、どのようにしてつくられたのですか。この見通しや戦略を考える上で、参考にした人やもの・コトは何ですか。現在の見通しや戦略を深めるために、どんな課題がありますか

(33)クラス経営で用いる手法はどのようなものですか。それはどのように獲得されたものですか

(34)クラスを経営する際の上手く行っている・行っていない等の判断基準は、何ですか。今のクラス経営を自己評価するとどうなりますか

(35)自分のクラス経営について、他のクラスの先生や上司はどのように評価をしていると思いますか

(36)クラス経営が上手くゆかない時には、それをどのように修正しますか。ひとりで修正できないときにはどのようになさるつもりですか

６．分掌にいてお聞きします

(37)その分掌で現在取り組んでいることは何ですか

(38)どのような課題があると思いますか

(39)分掌を経験する中で、理解されてきたことは何ですか

７．部活等についてお聞きします

(40)担当している部活は、（　　）部

(41)部員は何人ですか。部活の様子はどうですか。その部活を何人で担当しているのですか。先生は何を分担しているのですか

(42)部活指導にどれぐらいの時間をとられますか

(43)部活指導上、気をつけていることは何ですか

８．保護者との関係や地域社会との関係でお考えになっていることを教えてください

(44)保護者との関係で気をつかっていることは何ですか

(45)どのようなことを配慮し、関係づくりをしているのですか

(46)課題としていることは何ですか

(47)地域社会との関係で考えていることにはどんなものがありますか

９．教員生活全般に関して

(48)教員としての自分のアイデンティティはどのようなものだと考えますか

(49)現在の学校において、特に若手として求められていることはどのようなことでしょうか

(50)全体として今までの教員生活を振り返って、評価するところはどの点ですか、逆に課題は何ですか。また、この課題を達成するためには、どのようなことが必要がと思われますか

(51)現在で（　　年）の教員生活になりますが、仕事に慣れるまでに何年かかると思いますか。また、何ができたら慣れたと考えることができますか

(52)教科教育の実践・展開について、どのようなことができたら慣れたと言えると思いますか

(53)生徒理解は、どのように変化しましたか。最初の頃の生徒観と今はどの点が違うのですか

(54)生徒のどのような点が理解できたら、だいたい理解できていると言えると思いますか。参考になったものや影響を受けた人を教えてください

１０．これからの教員生活の展望について教えてください

(55)どのような教員になろうと思いますか。教員としてどのような経験を積みたいと思いますか。また、どのような勉強をしたいと思いますか

(56)勉強の仕方としては、学校外の研修、校内研究、先生同士の自主的な勉強会、大学・大学院への聴講等、お考えになっていることを教えてください

(57)仮に、教員を続けてゆけない時が来るとしたら、どのような時だと思いますか

(58)大変多忙な教員生活を送っておられると思いますが、自分の趣味の時間や生活のための時間の確保について、あるいは今後の展望についてお感じのことを教えてください

１１．新しく教員になる人(後輩)にアドバイスをするとしたらどのようなことですか

(59)教員を勧めますか、それともそうではないですか

(60)教員を志望する学生は、学生時代にどのような経験をしておくべきだと思いますか

１２．教員養成や教員の管理や評価全体に関して

(61)どこに問題を感じますか。何を変えればよいと思いますか

１３．教員の資質の向上について

(62)教員の資質の向上を考える上で、どんなことに注目する必要があると思いますか

終わりです。ありがとうございました。

（資料２）

「初任者教員の資質能力の向上を促すための教職課程改善の方途」
アンケート調査用紙

あてはまる項目に○を記すか、記述で回答をお願いします。

⑴年齢はおいくつですか。　　（　　才）

⑵最終学歴と学科について教えてください

＿＿＿学部　＿＿＿学科卒業　＿＿＿＿＿＿＿＿研究科・学院修了

⑶教員になろうと思ったのはいつ頃ですか。その理由は何ですか。

⑷取得した教員免許状をすべてお書きください。

（例：高等学校教諭一種免許状（理科））

＿＿＿＿学校教諭　免許状（　　）

＿＿＿＿学校教諭　免許状（　　）

＿＿＿＿学校教諭　免許状（　　）

⑸教員採用試験を受けた都道府県をお書きください。

①　　②　　③

⑹教員採用試験を受けるにあたって、出身地（実家）を考慮しましたか。

（ア）考慮した　（イ）多少考慮した　（ウ）特に考慮はしなかった

⑺現在勤務されている学校での職名と教えている教科・科目名をお書きください。

（正教員・常勤講師・非常勤講師）＿年生の＿＿＿＿＿＿　と　＿年生の＿＿＿＿

⑻クラス担任をしていますか。

（ア）担任である　（イ）副担任である　（ウ）学年付だが担任はない

⑼学校組織上の分掌は何ですか。何人で構成されていますか。

分掌名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　＿＿人

⑽部活等の受け持ちは何でしょうか。自分で希望されましたか。

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿部　（ア）希望した　（イ）希望ではなかった

⑾部活動の指導は平均で何時間くらいですか。

平日　＿＿＿時間　　土日休日　＿＿＿時間

(12) 1 日の平均的な勤務時間を教えてください。

出勤時間＿＿＿：＿＿＿　　退勤時間＿＿＿：＿＿＿

平均勤務時間　　時間くらい。

(13)授業準備はどのようにしていますか。

（ア）だいたい学校で準備をすませている。

（イ）学校では終わらないのでしばしば家に持ち帰って準備している。

（ウ）その他（　　）

(14)自分の授業づくりの準備に際して、参考にしていることはどのようなことですか。

（複数回答可）

（ア）同僚（先輩）の授業

（イ）教育実践集などの本

（ウ）その他（　　）

(15)授業準備の時、同僚の先生方と相談しますか。

（ア）たいてい自分一人で準備をしている。

（イ）ときどき先輩同僚の先生からアドバイスなどをしてもらう。

（ウ）その他（　　）

(16) 校内に授業や分掌、生徒指導など相談にのってくれる人がいますか。

（ア）いる

（イ）いない

（ウ）その他（　　）

(17)各種研究会、授業研究サークルに参加したことがありますか。

（ア）研究会、サークルに参加している（会員である）

（イ）ときどき参加することがある。（会員ではない）

（ウ）参加する機会はほとんどない。

（エ）その他（　　）

(18)教育実践の力量を向上させるために購読している本・雑誌はありますか。

（ア）定期購読している本・雑誌がある。

（イ）定期購読している本・雑誌はなく、必要なものをときどき購入している。

（ウ）その他（　　）

(19)本・雑誌はおもにどのように購入されていますか。(複数回答)

（ア）書店から　　（イ）インターネットから

（ウ）その他（　　）

(20)初任者研修（教育委員会主催など）に参加されて、よかったと思うことは何ですか。

(21)初任者研修（教育委員会主催など）に参加されて、教員として自分の課題は何だと思いましたか。

(22)校内研修会に参加されて、よかったと思うことは何ですか。

(23) 校内研修会等に参加されて、初任者であるあなたに求められていることはどのようなことだと思いますか。

(24)現在のお仕事全体で、最も力を入れていること、あるいは力を入れたいと思っていることは何ですか。(授業、分掌、部活動など）また、それはなぜですか。

(25)あなたの生徒理解はどのように変化しましたか。最初の頃（４月ころ）の教育観・生徒観と今はどの点が変わりましたか。

(26)現在勤務している学校での「やりがい」や「よろこび」はどのようなことですか。

本学の「教職課程科目」に関してお聞きします。

(27) 将来あなたはどのような教員になろうと思っていますか。またあなたの理想の「教師像」とはどのような教員ですか。

(28)北大で履修した教職科目のなかで、関心をもって受講できた科目があれば書いてください。また、差し支えなければその理由も書いてください。

(29)北大の教職課程科目をより良いものに改善するために、どのような内容を充実させるべきだと思いますか。初任者教員となった現在の立場から思うところを書いてください。

(30)在学中の教育実習はどこでしましたか。

（ア）母校でした。　（イ）母校以外の学校でした。

(31)教育実習をふりかえって、母校実習と母校以外での実習ではどちらが良いと思いますか。またその理由は書いてください。

（ア）母校実習がよい。　（イ）母校以外がよい。　（ウ）どちらでもよい。

理由

以上です。ご協力ありがとうございました。